さいたま市立宮原小学校
学校だより
令和8年10月30日　第7号

学校教育目標
・たがいに努める子(やる気)　・たがいにきたえる子(元気)　・たがいに手をとる子(勇気)

転ばぬ先の杖

井　上　　雅　史

今年の運動会は、10月24日(土)が天候不順のため２７日(火)に延期といたしました。24日に合わせ予定を調整していただき、楽しみにされていた皆様には誠に申し訳ありませんでした。２７日の運動会本番では、児童はこれまで準備してきたことをすべて出し切って取り組むことができていました。競技・表現はもちろんですが、高学年では運営の様々な場所で一人ひとりがかかわっています。これまでの小学校生活の中で積み重ねてきた、周りの人と協力しながら、目標に向かって粘り強く取り組む力を、運動会を運営する面でも頼もしく力を発揮してくれました。

運動会が終わると、次は「宮フェス」が控えています。ここでは、４年生以上の高学年が、１年生から３年生をリードしながらお店を企画運営します。高学年のそれぞれのグループで企画を話し合い、それをペアの低学年に説明し、計画を立て、長い時間をかけて準備してきました。ただ、話し合いの様子や計画書の内容を見ていると、最初の段階では、実現可能なのか疑問なものが多いことも事実です。

しかし、教員側は、児童の企画、準備の細部について最初からあまりうるさいことは言わないようにしています。あくまでも児童が自分たちの力で、周りの人と協力しながら進めることを大切にしたいからです。だからと言って、うまくいかないことが分かっていてそのまま放任していては、教育ではありません。教員側からも適切に指導を行います。

ただ、その「適切」のさじ加減が難しいところです。「適切な指導」とは「失敗させない」ことではありません。自分たちで苦労して作り上げたことは、成功しても失敗しても必ず学びになります。一方、何から何まで大人が細かく指導して当日の運営を成功させたとしても、人に頼り切って成功した体験は、その場限りの刹那的な楽しさで終わってしまいます。それは、実感を伴った深い学びにはつながらず、児童の成長にとっては、時にマイナスになってしまうかもしれません。

このように、児童に対して大人がどこまで手を出し関わっていくかについては、学校で何か特別なイベントを行う時だけでなく、児童の生活のすべての場面においても同様です。

すでに引退されているある先輩の校長先生が十数年前に書かれた学校通信が手元にあります。私はそれをずっと大切に取ってあるのですが、そこには「子どもにトラブル処理能力を」という題名で、次のように書かれています。

「子どもたちをたくさん見（視・看・診）てきた経験から思うことは、『長い目、広い目、基本の目』で育てられた子どもには、自制と寛容の心が育つということです。(中略)子ども自身が、自制と覚容の心で、相手の言い分に耳を傾け、自分の考えも冷静に伝える。嫌な思いをしても、自分たちの問題を自分たちで解決していくコミュニケーション力とトラブル処理能力の育成は、子どもの今後の人生を幸せにする鍵のように思います。「ころばぬ先の杖」は時には必要ですが、その杖が１０本も２０本もあっては、自立歩行はできません。」

『長い目、広い目、基本の目』とは、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、ものごとを判断したり考えたりするときに意識すべき３つの異なる視点を表現した言葉です。これは、教育(子育て)でも大切な視点になります。「長い目」とは、今すぐの安心を求めるのではなく、この子の１０年後、２０年後の将来の姿を考える長期的な視点。「広い目」とは、我が子も含めた全ての子どもにもそれぞれ事情や成長の過程があることを認め、偏りなく様々な方向から理解する多角的な視点。そして、「基本の目」とは、子どもが自分の力で正解のない社会を生き抜く力をつけることこが教育(子育て)の目的だと言う事を忘れない、つまり物事の本質を見失わない視点です。

我々教員は、児童が成功できるように、うまくできるようにと考え、つい、ああしろこうしろと、うるさく指示してしまいがちです。保護者の皆様も我が子を思うあまり、今すぐ結果を求め、つい手や口を出したくなるという時があると思います。

「転ばぬ先の杖」、つまり大人の手助けを予め差し出すことは、時には必要です。低学年は高学年より多めに用意しておくことも必要でしょう。しかし、その「杖」を大量に用意して「失敗させないこと」「困難な状況から完全に切り離すこと」をしていては、児童は成長の機会を逃してしまいます。大人が「杖」を少しずつ減らし、温かい目で見守りながら「失敗から立ち直る経験をさせること」「困難に挑戦する経験をさせること」が、子ども自身の本当の強さと優しさを育てます。

大人側としては、時に苦しい選択となるかもしれません。ですが、我々大人自身も、その選択をすることで成長しているのかもしれません。

今後も、学校と家庭が同じ方向を向き、子どもたちの「自分で歩む力」をともに育んでいければと考えております。引き続き、本校の教育活動へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。